

## C1. 【新型コロナウイルス流行下における原因不明の小児の急性肝炎について】

2022年4月15日、WHOから欧米を中心に小児に原因不明の急性肝炎の報告が急増しているという情報が発信されました。特に英国では見つかった子どものうち約7割がアデノウイルスに感染していたと報告され、関連があるのではないかと指摘されました。この情報を受けて、日本でも厚生労働省がその症例定義（ASTまたはALT >500 U/LでA～E型肝炎の関与が否定されている16歳以下の小児）に合致するケースを保健所に届けるよう指示を出しました。その調査によると2022年9月15日までに101例の入院症例があるが、これまでのところでは死亡に至るような重症例はないとの報告になっています（<https://www.mhlw.go.jp/content/000990796.pdf>）。

\*\*\*\*\*

急性肝炎には、緊急的に肝移植をしなければ救命できない「急性肝不全」や「劇症肝炎」といった重篤な経過をとるものもありますが、多くは安静と補液といった治療で自然に治癒していくケースが多いものです。このWHOが発信した症例定義には、必ずしも重症の肝炎だけではなく、結果的に軽症であったケースを多く含んでいます。問題は、重症になるケースが本当に日本の子どもたちの間で増えているのかどうかです。今のところ、以前（新型コロナウイルスの流行が始まる前）と比べて日本の子どもたちの間にそういった急性肝炎が増えているとか、重症で肝移植を受ける子どもが増えているというデータはありませんが、これについては日本小児科学会が中心になって全国的な疫学調査（コロナ前と後で発生状況に変化がないかの調査）が行われることになっています。

一方、原因としては、新型コロナウイルスの時代に入って感染予防策が徹底されたことで子どもの免疫機能が低下し、体内に入ってきたウイルスと闘う過程で不適切な免疫反応を起こして病気を引き起こしている可能性や、肝炎の原因となるウイルスが変異したことなどが考えられます。また、新型コロナに感染したことが影響し、その後、アデノウイルスなどが体内に入ってくることによって免疫の働きが過剰になり、正常な肝臓を攻撃してしまっていることが示唆される研究報告も出されています。いずれにせよ、現時点でははっきりとした科学的な根拠は確定していません。

とはいえ、病原体に対する感染対策を続けることは重要ですので、こまめに石けんやハンドソープを使って手洗いをするよう指導することが大切です。ウイルスが原因となる胃腸炎を発症した後、黄疸の徴候が現れた場合は肝炎の可能性が強く疑われます。また、黄疸がなくとも子どもの様子が『いつもと違う』と感じた時も注意が必要です。他の疾患の診療を目的とした血液検査で偶然見つかる場合もあります。

肝炎の入り口は、血液検査を行うことによって初めて見つかることが多いため、かかりつけ医や一般小児科診療での的確な判断が重要です。